



# 津田永忠と閑谷学校

## 津

田永忠の足跡をめぐる旅の最後に、閑谷学校と永忠の墓所へと向かう。岡山駅から山陽本線に乗り、三〇分ほど揺られて吉永という駅でおり、閑谷学校は駅から三キロほど離れた山間にあり、道路状況がわからないのでタクシーを呼ぼうと思っただが、同行者は静かな里山のような風景だし、晴れの国に相応しい天気だから歩きたいという。同行者が力尽きないか心配だが、とりあえず出発する。閑谷まで歩道が続いているか心配だったが、広いのがしつかりと整備されていて驚いた。世界遺産登録を目指しているそうなので、そのためだろうか。のどかな道をぶらぶら歩き、今は歩行者専用となった大正十三（一九二四）年建設の閑谷隧道を抜けると、そこは閑谷学校だった。

カマボコのような珍しい形の石塀が、ずっと続いている。長い塀に沿って進むと竜宮城のような門があり、それをくぐると広い敷地に備前焼きの赤い瓦屋根の建物が見えた。学業の中心となった「講堂」だ。元禄十四（一七〇二）年に建てられ、国宝に指定されている。

それにしても山間だから、もつと薄暗く鬱蒼とした場所かと思っただが、まったく違う。日当たりがよく、きれいに刈り込まれた冬芝が日差しを受けて淡

白く輝き、明るく清浄だ。学校建設の主導者だった初代岡山藩主の池田光政が、この地を選んだ理由がわかるような気がする。

寛文八（一六六八）年に、光政は藩士やその子弟のための藩校のほかに、庶民教育を目的として領内一二三箇所「手習所」という藩営の教育施設を設けた。しかし、これは財政などの問題からほとんど間引かれて、最終的には閑谷のみが残った。「山水清閑宜読書講学之地」として光政が愛したことが選地の理由とされる。光政は閑谷学校の永続を心より願い、永忠は主君の死後もそれを忠実に守り、次のような方策を企てた。

一つ。財政基盤構築のため、学校を地主にして、年貢や小作料を徴収できるようにした。こうすれば、たとえ池田家が岡山から移封になっても財源は確保できる。

二つ。防火対策を充実させた。特に学校敷地の西側にある生徒の寄宿舎などは火災が起きやすいため、山の稜線を延ばした「火除山」という防火施設を設けて、東側の講堂など主要な建物から隔絶した。

三つ。建物自体を徹底的に堅牢化した。なかでも屋根構造は、柿葺き・板葺き・瓦葺きと重ねる三重構造とし、板の合わせ目など隙間を漆で固めて周到

な防水対策が施された。それでも万一、屋根内に水が溜まった場合を想定して、各瓦の列ごとの軒先に陶管の排水パイプを設置した。

現代の建築関係者が驚愕したこの雨仕舞をはじめ、当時最高の材料と技術、そして永忠の執念が、閑谷学校の講堂など主要な建物を、大した修理も要せず三〇〇年以上も存続させた。そしてもう一つ。閑谷学校を守るために永忠が下した決断があった。

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館

江口知秀  
Tomohide Eguchi



閑谷学校の講堂

[交通] JR山陽本線 吉永駅から徒歩約40分